

戦争！ 北満での体験

群馬県 尾 嶋 みさを

一 はじめに

終戦から早くも六十有余年の歳月が流れた。思えば、一夜のうちに天と地がひっくり返ったような出来事。そして恐怖と不安と残酷と死と、あらゆる悪魔が渾然となつて押し寄せてきたあの八月九日を、私は決して忘れることはできない。

人は「悲しみ、苦しみ、つらさは歳月が解決してくれる」と言う。しかしあの悲惨な体験は、いまだ一日たりとも私の脳裏から消え去ったことはない。むしろ、歳月が経つほどに、忌まわしい情景は鮮明に甦り、その一齣一齣が重く苦しく胸に迫ってくる。

戦争は、意味もなく多くの人々の命を奪い、愛する人々を引き裂いてしまう全くの不条理な行為であり、最大の罪悪である。

二 渡満

私は、昭和五（一九三〇）年に群馬県伊勢崎市に生まれた。父は陸軍の軍人で、三歳のときに満州の遼東半島南端の地、旅順に両親と共に渡った。日露戦争の舞台となったこの地は、二百三高地、東鶏冠山水師營会見所等数々の戦跡があり、訪れる観光客も多く、また海と山に囲まれた自然豊かな街であった。この街で私たち家族には昭和十年に妹が生まれ、それに女中さんを加えて五人がいて、それぞれの思い出多き十年間を送った。しかし、第二次世界大戦は次第に激化し、満州に駐屯していた日本軍は次々と南方戦線に派遣され、手薄となつた関東軍は北へ北へと移動して行つた。父も命令により移動となり、それに伴つて我が家族も昭和十八年九月に中国東北部の阿城へ転勤となつた。さらに昭和十九年三月には、ソ連との国境を接している東寧へと逐次北上して行つた。私も旅順高等女学校からハルビン富士高等女学校へ、そして牡丹江高等女学校へと転校した。牡丹江と東寧は列車で十二時間と遠距離にあり、当然私は寄宿舎生活をする事になつた。この時期に、内地の人々とは異質の戦争体験を余

儀なくされたのであった。

三 運命の別れ

牡丹江の街は、満州事変を契機に発展し、旧市街、新市街、第二新市街と拡張されていった都市で、昭和十四年には高等女学校も新設されるなど、希望に満ちた街であった。しかし昭和十八年ごろより戦況は非常事態となり、中学校も女学校も勤労働員が始まった。我が牡丹江高等女学校でも、上級生は女子挺身看護婦として陸軍病院で奉仕し、また電信電話局で交換手の任務にもついていた。私たち下級生は、満州各地の開拓団に配属されて、二週間交代の泊り込みで託児所奉仕に当たり、非番の生徒は陸軍病院用マスクを作る毎日で、学習する時間はごく少なくなつた。

私が派遣された開拓団は、奥地の東安省龍頭開拓団であつた。幼児の扱いに不慣れな私は戸惑いの連続だつたが、それ以上につらかつたのが食事と睡眠であつた。毎日が高粱飯と古漬沢庵のみ、まれに豚を売つたときの廃物である内臓と血液を小腸に詰めて加熱した腸詰が、食卓に並ぶことがあつた。どうも黒い凝固血液

の色と、香辛料も使わない内臓の生臭さは、他の食品にまで移り、とても喉を通らなかつた。夜はひと晩中、蚤と南京虫に悩まされた。オンドルの床は、夏でもかまどの煙で生温かく、蚤、南京虫には好適の住処であつた。しかしそのころは、つらいなどという言葉はおくびにも出せず、頑張つていた。

二週間の予定が終わろうとしていた矢先のこと、一通の電報が届いた。「転校手続きをして至急帰宅せよ」という家からの知らせだつた。ソ満国境の情勢が不穏となつたため、軍人、軍属の家族は日本に引き揚げることになつたのだつた。私は急ぎ帰省、引揚げの日を待つた。しかし何日待っても連絡がこない。うわさでは「既に出航した引揚船が次々に魚雷によつて撃沈されているので、出発を見合わせている」とのことであつた。友だちは今、お国のために「月月火水木金」と頑張っているのに、私は毎日を安閑として帰国の日を待つていて良いものかと、いたたまれぬ気持ちになり、取り敢えず学校に戻ることにした。このとき駅まで見送つてくれた母は真顔になつて「お母さんはもう

覚悟はできていますからね。何かあったときにはこの満州の土になる覚悟ができていますからね」と何度も強い口調で言った。私には何を言わんとしていいるの可以理解ができず、不思議な言葉であった。だが、あの言葉が母の最後の言葉となろうとは、知る由もなかった。それから一カ月後に、不測の出来事が起きたのだ。

四 ソ連軍侵入

昭和二十年八月九日、私の入っていた軍人軍属子女の寄宿舎である星輝寮では、平常通り朝食前の作業を終え、舎生は食堂に集まっていた。朝食の箸を取ったそのとき、突然大きなサイレンの響きに驚かされた。余韻を残して消えてはまた鳴り響く不気味なサイレンは、いつまでも鳴り続けた。訝しく思い窓にかけ寄り外を見ると、地平線近くの空に黒い塊のようなものがある。そしてそれが少しずつ大きくなっていく。しばらく様子を眺めていると、窓の下で公報車の拡声器が、大声で「空襲警報発令！ ソ連軍機襲来せり！ 急いで防空壕に待避せよ！」と繰り返しながら走り去った。寮監が「急いで防空壕へ行きなさい」と指示をする。

皆は驚き、どよめき立った。私はとっさに「食卓の上はそのままにして、早く防空壕へ避難して下さい」と言いながら、食卓から食卓へと飛び回った。上級生不在の今、私が責任をもって食、べ物の腐敗や蠅からの汚染を防がなくては、と考えた行動だった。卓上の片付けが終わると一目散に階段を駆け降り、その勢いで裏口から壕へ向かって飛び出した。そのとき頭上には既にソ連軍機の編隊が来ていた。「あつー」と思った瞬間、二機が編隊を離れて急降下、墜落かと見上げると、私の横一メートルの所一直線に砂煙が舞い上がった。「ビシ！ ビシ！」と機銃掃射の雨。夢中で地に伏したが、そのとき右腕に「ビーン」と痺しびれのような痛みを感じた。「やられた！」と、しばし空白のときが流れた。ややあつて我に返ると、敵機は既にはるか彼方の空に小さくなっていた。「おやー」腕の痛みが消えている。血も傷もない。体を掠かすめるように飛んで来た弾丸の空気振動で、痛みを感じたようだ。

この襲撃以降、二、三十機編隊の敵機は何度も繰り返し飛来し、旧市街のあちこちから黒い煙が立ち昇っていた。夕方には、学校の校庭も校舎も奥地からの避難者で埋め尽くされた。だれも皆恐怖に満ちた表情であつた。

一夜明けると、星輝寮には生徒の家族が次々と現れて、生徒を迎えに来た。一人また一人と去って行く友を羨ましく見送りながら、取り残されていく自分が惨めで悲しさが胸に迫つた。いくら待てども、我が家からの連絡はなかつた。電話をかけても電話機の向こうからはザーザーという虚しい音が聞こえるのみ。不安に悶えながら夜を明かした。

翌十一日、たまりかねて領事館を訪ねた。なぜ領事館を頼つたのかは全く憶えていないが、雑囊と防空頭巾を抱え、サイレンを気にしながら太陽の照りつける道を領事館へと急いだ。領事館の玄関を入り奥の広間をのぞくと、運良く若い男性職員が通りかかった。「チャンス！」と近寄り、懇願するように事情を訴えると、彼は上司に相談して来ると奥へ入って行つた。間もな

く彼は笑顔で戻つて来て、「貴女は私どもと行動を共にいたしました。今は会議中ですから、少々お待ち下さい」と言い、隣の部屋へ案内してくれた。すつかり安心して本を読みながら待つたが、それからは一向に連絡がない。待つこと四時間ばかり、やつと現れた彼は渋い顔で、「戦局が非常に悪化してまいりましたので、我々職員の行動はこの先どうなるのか分かりません。現在会議は続行しておりますが、貴女をお守りすることはできなくなりました。一刻も早く牡丹江を脱出し避難して下さい」と言つた。シヨックで声も出ないほどだった。仕方なく日暮の道をトボトボと寮に戻つてみると、下駄箱には既に数人の靴しか残つていなかった。薄暗い部屋にへたへたと座り込み、ただ放心状態していると、大きな拡声器の音で気を取り戻した。「四時間後には牡丹江市にソ連軍の戦車が侵入して来ます。命の惜しい人は、ただちにこの街を脱出して下さい」途方に暮れながら、取り敢えず当座の荷物をまとめて、指示を待つた。七日か十日もすれば戻れるものと考えていた。やがて舎監がやつて来て、「男性教師

は皆この牡丹江市を守らねばなりません。皆さんは、鈴木秀子先生と共にこの街を脱出して下さい。」と命じた。私たちはリュックサックを背に、三三五五と寮を後にした。

五 牡丹江脱出

寮を出ると漆黒の闇、雑草の生い茂る畑道を、頭上の爆音が聞こえるたびに草むらに伏せながら、黙々と駅へと急いだ。旧市街は真赤な火柱と黒煙が上がり、その炎に照らされて目指す駅が浮かび上がって見える。駅に近くなると人影は増し、線路を跨ぐ高架橋は避難する人で埋め尽くされていた。ざわめきの渦を掻き分け、やっと駅に辿り着けたが、ホームに出ようにも草揉状態に進むことができない。先生の大声に急かされ、やっとホームに出た。長い列車には溢れんばかりの人が詰め込まれていて、とても乗れる状態ではない。私はホームを右に左にうろついていると、遠くの若い駅員が大声で「そこの子は乗るのか！ 乗らないのか！」と狂ったように怒鳴りながら駆けて来て、近付くやいなやグイッと手を掴み、何も言わずにどンドン後方に

走った。線路上のゴロ石の上を、挫きそうになりながらもぐいぐい引かれて走った。ホームが終わっても、四百メートルはゆうに走った。やっと辿り着いた最後尾の貨物列車に乗ろうと焦るが、足場が胸の高さで足が届かない。駅員に急かされ横の鉄棒に縫りながら懸命に足を掛ける。駅員も必死に背の荷物を押し上げ、葛藤の末やっと乗ることができた。暗い貨車の中は木箱がびっしりと積み込まれ、上部わずか一メートルの隙間に潜り込んだ。荷物を下ろし身をかがめて座つたとたん、列車は動き出した。車内からコンコンと声が聞こえる。「この下の木箱は全部軍用火薬だよ。一発爆弾を落とされれば、我々はたちまちお陀仏なのさ」ひと事のように話していたが、私の体は金縛りにあつたように身動きができず固まった。そのとき急に列車が停まり、ガタガタと鉄の扉が開いた。「早く降りろ！ 降りたらできるだけ遠くに逃げて草むらに伏せろ！」叫び声に驚き、慌てて高い列車から夢中で闇の中に飛

び降り、凸凹の石の上を土手から草むらへと転がるように逃げて、息を潜めた。敵機が過ぎると再び貨車によじ登り、火薬箱の上に納まる。走っては停まり、飛び降りてまた登る。何度となく繰り返しながら十八時間もかかって、やっと十二日十五時ハルピンに着いた。

一年前は通学していた懐かしいハルピンも、避難民でいっぱいだと聞いた。ホームに降りてギョツとした。隣の線路上に、見るも無惨な列車が停まっていた。列車の窓は割れ、車体には無数の弾の跡、屋根からは赤黒い血糊が幾筋も流れたままだった。我々の前に出発した列車であった。屋根の上まで大勢乗っていた人々が、機銃掃射を受けて命を落としたと聞いて、身の毛がよだち震え上がった。

夕方になって無蓋車に乗り替え、再び出発した。夜が更けるにつれて気温が下がり、寒さが身に凍み、互いに体を寄せ合って日の出まで耐えた。日が高くなるのと、今度は直射日光の熱で髪が焦げ臭くなるほどの暑さに閉口した。

翌十三日午後三時、国都新京に着いた。大きな駅の

すべてのホームに、行き先の定まらぬ避難列車が停まっていた。構内は隙間なく人で埋めつくされ、ごった返した人の波、血眼になって仲間を呼び、恐怖で泣き叫ぶ声、群衆を掻き分けて家族を探す姿、まるで機械工場内の騒音のようで、隣人の話も聞き取れないくらいに混乱振り。まさに修羅場という光景であった。先生から「在滿教務部も関東軍司令部も蛇の殻です。これから先の見通しがつかないので、皆さんの中で親戚や知人に当てのある人は、その人を頼って行きなさい」と言われた。私にはだれもない。糸の切れた風の思いで当惑した。

夕方になって、騒音の中から微かに構内放送が聞こえた。「新京の街は避難民でいっぱい、これ以上街に留まることはできません。行き先のない人は、これから最後の南下する列車が出ますから、それに乗って下さい」見れば、既に列車は満員状態。窓から乗り込む者、腕力で乗り込んでいる者、林のような人に挟まれながらやっと乗ることができたが、息苦しく少しの隙間に顔を向け、やっと息をしていた。奉天近くで一人

の紳士と先生が話していた。「行く当てがないのなら、金州陸軍病院を紹介いたしましょう」と。そしてお世話になることとなった。金州駅には二十二時に着いた。駅で朝を待ち、病院からの連絡を待った。

十時に、陸軍病院からの迎えの兵に案内されて日照りの道を病院へと向かった。前方から「今日正午に重大発表があるそうです」という会話が聞こえた。到着すると、集会場らしき一室に多くの人が集まっていた。

物見高い私は、その部屋に潜り込み様子を窺った。正午、前方のラジオから低い声が流れてきたが、言葉は全く聞き取れなかった。前方の人々は、床に頭を付けてすすり泣いていた。後になって、先の放送は玉音放送で、日本の国は降伏したらしいと知った。神国日本が負けるはずなどないと否定しつつも、時間とともに胸が締め付けられるような苦しさで頭の中が空白になっていく。今後我々はどうなるのかと様々な空想、様々な情景が頭を駆けめぐったからだだった。「間もなくソ連軍が侵入し、戦勝国をいいことに傍若無人な振舞い、我々を皆殺しにするだろう。銃剣で刺し殺すのか―血

まみれになって逃げ惑う群衆の姿が目には浮かぶ―数珠繋ぎにされ大部屋で毒殺か。それとも皆を一行に並べ、

目の前で順々に銃殺か。いや体を雁字搦がんじがらめに縛り丸太のように道路上に並べ、その上を戦車が音を立てて轢き殺していくのか。そうされる前に、自ら命を断つべきか―考えて考えて、疲れ果てた。このときほど、命の存在を強く見つけたことはなかった。

この夜から、街は暴動、掠奪、殺害、誘拐と惨憺たる有様となった。

六 流浪の生活

敗戦を知り、悶々ときを過ごしていると、夕刻病院からの配慮で、私たちを軍人、軍属の家庭でお世話して下さることになった。私は、堀軍医少佐の家庭に迎えられた。優しいご主人、上品な奥様、可愛らしい五歳の男の子の三人家族であった。和やかな家庭生活は疲れた心を癒してくれたが、それもわずか十日足らずで終わった。

八月二十五日、ソ連軍が進駐しすべての官舎は接收

され、部隊内兵舎に移された。治安は一層悪化、中国人に加えてソ連兵の虐待、強姦を恐れ、看護婦は白衣を脱ぎ軍服軍帽の男装となった。女学生たちも髪を耳の上まで短く切り、まるで、這い這い人形の頭であった。

部隊内から一步も出られない生活が続き、部隊の役に立つことはないかと考え、部隊内農園の作業を手伝った。キャベツ畑の青虫駆除だった。虫を箸で摘むとピクリと動く。キヤーと黄色い声が響く。冬近くなって食糧倉庫の作業に変わった。冬越しの準備で傷んだ白菜の葉を除き、人参の腐りを切り捨てる作業だったが、ふと捨てるのが惜しくなり一切口にした。何と、熟し過ぎ崩れた柿の味に思えた。隣の友に話した。たちまち左右の友に広まっていった。

夏着のまま十月の寒さに耐えるのはつらい。廃校校舎の白いカーテンをもらい、ズボンとシャツを縫って重ね着をした。食糧も日毎に少なくなり、朝は卵大の馬鈴薯二個、夕食は水ばかりの高梁粥になった。空腹に耐える対策は、まず馬鈴薯の皮を食べた後、箸裏で時間をかけて潰しマッシュにする。食べる喜びを少し

でも長く楽しみ、大豆粒の大きさを口に運んだ。

十一月半ばであった。金州の日本人全員に移動命令が出た。大きな荷物を背負い、氷点下の道を長い列をつくって駅に向かった。暖房も無い列車にひと晩中揺られて海城駅に着き、再び蟻の行列のように五十分ほど行くと、旧騎兵隊兵舎があった。埃にまみれた兵舎の掃除中、強い悪寒に悩まされた。昨夜の寒さが祟ったのか、三十九度の高熱だった。早めにベッドに入り震えていたところ、階下から荒々しい足音を立てて三人のソ連兵が部屋に侵入して来た。友だちは蜘蛛の子を散らすように他の部屋に隠れたが、私はどうにも動けず、毛布を被って息を潜めていた。大男たちは私の毛布を摘み上げたが、感染を恐れたのかそのまま去って行った。巨人たちは毎晩のようにやって来て、厚い扉を揺らしたり蹴ったり大声で騒ぎたてる。耐え兼ねた私たちは、兵舎の周囲から太い心張り棒を探し、扉を強化した。夜間のトイレは二斗樽を見付けて室内に置き、翌朝、交代で樽の始末をした。

ある朝、樽の始末を終えトイレの床を掃いていると、

床に梅干のようなものが転がっていた。トイレに梅干？と不思議に思つて箒の先で転がしていた。そこへ二階から軍属のおばさんが駆け降りて来て、「この辺に舌は落ちていなかった？」と叫んでいた。昨夜、彼女がトイレに降りて来たとき、ロスケに飛びかかれキスをされた。強気な彼女は、ロスケの舌を噛み切つたと話した。私が転がっていた梅干様物体が舌であつたことを知り、唾然となつた。

十二月の厳しい寒さに軍用毛布が配られた。ありがたく早速ハーフコートを縫つた。残りを丹念にほぐしてセータを編んだ。一目一目編むうちに、母の姿が忍ばれた。何度も夢に出てきたが、残念にも言葉を交わすことはなかった。

ペチカの薪も底をついた。ソ連兵の目を盗んで馬小屋を壊し、薪にした。板壁に足を掛けて力いっぱい板を剥がすのだが、避難を始めて半年、既に靴下は穴だらけ、靴底は擦れ、靴先は破れ、歩くたびにパカパカと口が開いて冷たい雪が染み込んでくる。手足は冷たく感覚がなくなる。つらい作業だった。このころから

栄養不足による死者の数も増し、女学生たちも手足が霜焼けで崩れ、下痢、発熱も多くなつた。私は虫歯の痛みに苦しんだ。我慢がならず医務室を尋ねたが、医務室には薬も器具も少なく、麻酔もせずに抜かれた。私は「ウーウー」と堪えるしかなかった。

こうした不自由な生活に追い討ちをかけるように国府軍と八路軍の内戦が始まり、西方地区で激戦となつた。負傷者介護のために看護婦たちが次々に駆り出され、慌ただしい雰囲気となつた。戦場は我々の近くまで及び、銃弾、砲弾が左に右に飛び交い、夜になると真赤な光が花火のようであつた。こんなとき、久々に風呂に入れることになり、井戸水をバケツリレーで汲み入れていると、頭上すれすれに流れ弾が飛び、大慌てで地に伏し服も手も泥まみれになつた。入浴中に持金全部盗まれてしまった。

七 帰国のきざし

酷しかった冬も過ぎ、木々が淡い緑に染まつた五月十九日の朝、突然移動命令がでた。朝食も摂らず理由も知らされず、荷物を持って広場に集まつた。広場は、

春特有の満州風が砂塵を巻き上げ、吹き荒れていた。既に白衣の兵、担架に乗せられた兵、病院関係者たちなどが大勢集まっていた。我々も、後方で目を細め鼻を覆って、埃の中で指示を待った。

昼も大分過ぎて、国府軍将校が現れて整列を命じ、おもむろに演説を始めた。演説の概要は「日本は戦争をしかけた悪い国だが、これから皆を国に帰してやる。貴重品、写真、刃物類は一切持ち帰ってはならない」という話だった。厳重な荷物検査が始まった。私は、母の名が彫まれている裁ち鋏だけは、何としても持ち帰りたいかった。検査係の兵が迫って来る。鋏をどう隠したら良いか、名案が浮かばずに焦った。ふと横を見ると、傷病兵の列は既に検査が終わっている。荷物が少ないためである。とつさに私は傷病兵の列に駆け寄って、「母の形見を預かって下さい」とだけ言ってタオルに包んだ鋏を手渡すや否や、元の列に戻った。白衣の兵は驚いた様子であったが、細かい説明をしなくてもすべてを理解してくれたようだった。厳しい検査も終わり、いよいよ出発となった。

長い行列の最後尾に続いて駅に向かった。やっと駅に着いたが、列車には乗せてもらえず炎天下で待たされ、日暮れになってようやく乗り込むことができた。今度は動かない。朝から何も口にせず、喉の渇きに声も出ない。翌朝になって列車はやっと走り出し、北奉天駅で降ろされた。再び行進、着いた所は屋根も床もボロボロの野宿同然の浮虜收容所であった。ここに一泊すると、また移動を命じられた。長い道のりを三時間歩くと、昨日よりさらにひどい建物、それは旧興亜会館であったが、そこに入った。

落ち着けぬ一夜が明けると、集合命令が下った。しぶしぶ出て行こうとすると、廊下で炊事係の兵に呼び止められ、「貴女たちは出ない方が良い。ここで炊事当番の振りをしていなさい」と言われ、そこに留まった。兵は、おにぎりを握りながら「この集会は共產思想の洗脳だよ。講議と訓練の後、日本に帰ると餓死する。中国に残れと説得するのだ」と話していた。

こうして、このあばら家で数日を過ごし、再び北奉天の浮虜收容所に一泊、毎度の荷物検査の後、胡盧島

行き列車に乗った。側壁も屋根も無い貨車は、カーブで大揺れすると振り落とされそうで怖く、中央に寄り添って座っていた。葫蘆島に近付くにつれ、野も山もベンガラ色の赤土に変わった。駅から三キロメートル、収容所前の広場で夕刻まで待たされた。地に腰を下ろしている、シヨクワイ 子 孩（スイヤオマ 子供）が「水要嗎（水はどうですか?）」と売っている。盗まれた三百円が恨めしかった。薄暗くなつて、少量の高梁が配られた。炊事場も薪もない。暗い山中で小枝を拾い歩き、石を積みかまどを作り、苦労の末、高梁粥がで上がった。狭い部屋に押し込められ、三日目の夕方「広場に出る!」と言われ皆集まった。そこで五、六人の国府軍の兵が一人の日本人男性を引き摺り出し、「この男は今、建物を壊して薪にしようとした。このような悪者が一人でもいることは、全員の責任だ。乗船を延期する」と大声で怒鳴りながら男性の両手を横に挙げさせ、丸太棒で思い切り殴る。そのたびに身の竦すくむ思いで目を背けてしま

った。難癖は何度か繰り返され、出発も延ばされた。

八 信濃丸で日本へ

六月八日、いよいよ乗船を知らされ駅まで歩き、無蓋車に揺られて埠頭に着いた。荷物検査、別室でDDDT粉末で消毒をされ、岸壁に出た。大きな船が横たわっている。船腹には「信濃丸」と書かれていた。日本海開戦で活躍した、有名な船で帰国できるのだ。嬉しくなつて足どりも軽くタラップを登った。船上では美しい歌声が流れていた。「赤いリングに唇寄せて……」と不思議な歌である。軍歌ばかりを聞いて育った私には、驚きであった。甲板に立ち「ご苦労さま」と迎えてくれた船員の笑顔にホッとした。狭い鉄階段を降りると、広い船底は上下二段に区切られ、見渡す限り人で埋め尽くされ臭っていた。人いきれと汗の臭いが充満していて、息苦しかった。しかし、それ以上にいたたまれなかったのは、兵隊や看護婦のふしだらな行爲だった。避けるように、昼はほとんど甲板で過ごした。青い穏やかな海原を一人眺めていると、三十歳前後の将校らしい人に話しかけられた。高崎に帰ると

言う。同県人と知り、いろいろ話が弾んだ。「手相でも見てあげようか」恐る恐る手を出すと、しばらく眺めて「親子の縁が薄いな」と言われ、すっかり落胆している、「何年か後にお父さんに会えるよ。何年か後の九月ごろね」と言ったが、私には慰めの言葉としか思えなかった。

乗船六日目、遙か水平線に細く一直線の陸が、やがて緑豊かな山並みとなった。皆「日本だ!」「日本だ!」と美しい日本に感激した。下船は翌十四日となった。早くも祖母の家を脛に浮かべながらタラップを降り、日本の土を踏みしめた。忙しく人が行き交う波止場を抜け、検疫所で予防接種とDDT粉末で消毒し、休憩所に案内された。エプロン姿の婦人会の方が、お茶と大きなパンを配ってくれた。日本は豊かなのだなと思いつつながら一口齧ったとたん、パンはポロポロと崩れた。大きなパンは麩ふすまで作ったものだった。それでも空腹の胃袋は喜んだ。その夜は宿舎松原寮に一泊し、先生

からこれからの生活や人生についてお話を戴き、友と別れを惜しんだ。別れの寂しさと、これからの期待とで眠れぬ夜であった。

九 故郷へ

友と別れ、案内所で帰郷方法を教えられたとおり、鮪詰の列車で東京へ向かった。車中の通路で荷物に腰掛け揺れていると、会話が耳に入った。「ここは広島辺りかな、広島はひどいことだったな。全くの焼け野原だからな、復興は大変だろうな」「復興どころか草木も生えないらしいよ」このとき始めて広島に原子爆弾が落とされたことを知った。夜で、街の様子は見ることはできなかった。

翌日東京駅から上野駅に出た。上野は大きな荷物を担いだ人でいっぱいだった。駅員が私の傍に来て、「混み合うから先に改札を出なさい」と改札を通してくれた。優遇してもらえ、ありがたく思って小走りにホームに向かっていると、後方から「ワー」と喚声があがり、ドタドタと大勢が雪崩れのように改札を飛び越え、我先にと走り列車に乗り込んだ。食糧買い出しの人々

だった。私たちが優遇されたことに、腹を立てたらしい。敗戦国の実態を垣間見た思いだった。先ほどの駅員が駆けて来て、私と背中荷物を窓から押し込んでくれた。客席の間に飛び込んだ私は、目の前の紳士と目が合った。彼は、にこやかに「どこから来たの」「大変だったね」と話しかけながら、鞆の中から新聞紙の包みを取り出し、中から大きな白いおにぎりを「おあがり」と差し出した。麩のパン以来の食事であり、遠慮することも忘れて戴いた。思わず「純米だ!」と叫んでしまった自分の声に驚いた。紳士も一緒に、にこにこ頬張った。胸がジーンと熱くなった。

夕方七時ごろ、高崎駅に着いた。明朝一番列車に乗るべく、駅で夜を明かした。伊勢崎駅で降り駅舎を出てみると、見渡す限り焼け野原。終戦前夜の空爆で、街は焼き尽くされたのだった。駅の西に小さな交番があった。そこから祖母の家に連絡を取ってもらった。一時間ほど後、伯父が自転車を迎えに来てくれた。瘦せた私を確かめるように「ミーコか?」と言った。大きな荷物も雑嚢も私も、皆自転車に乗せて走り出した。

祖母の家では、私が弱り果てて来るだろうと、粥を作って待っていてくれた。一年振りに暖かい家庭に包まれた。ミーコ、ミーコと子猫のように呼ばれ、かわいがられた。そして二学期(九月)から、女学校に編入させてもらうことができた。校舎は空爆で焼け、旧中島飛行機の工場跡を利用していた。学習内容も戦前とは大きく変わっており、友だちに助けられ励まされながら、一年間の空白を埋める一方、満州の様子や引揚げ時の話を語り、楽しい毎日であった。

十 母たちの消息

学校生活が始まって半年過ぎたある日のこと、悲しい知らせが届いた。母の消息である。礪氷郡の萩原さんという婦人が、母たちの消息を伝えに来てくれたのだった。萩原さんも大変な苦勞を体験した引揚者だった。ソ連軍侵入のとき、生後三カ月の長男を抱えて北滿を脱出し、必死の逃避行中「七歳以下の子供は足手まといになるから殺せ」と命令が出た。親たちは、とても我が子を殺すことはできず狂乱状態となった。兵隊や他人に頼んで殺してもらったのだが、萩原さんは

どうしても三カ月の乳児を殺すことはできず、小さな毛布に包み手荷物のように抱えて逃げていた。ところがソ連兵に疑われ、その包みを投げ出された。乳児は三メートルも先に飛ばされ、命を奪われてしまった。

そして集団とともに新京に辿り着いたものの、我が子を失った悲しみはどうすることもできず、気持ちを紛らわすために新京駅の近くに開設された避難民の世話をする難民支援団体で働き始めた。萩原さんが受付に携わった十二月十日ごろ、一人の兵に付き添われて来たのが私の母たちであった。萩原さんは母と話をしながら同県人であることを知り、親身に世話をしてくれたのだった。

母たちは、昭和二十年八月九日未明、突然ソ連軍戦車の侵入に遭い、激しい攻撃を受けた。このとき、多くの日本人は早々と軍用トラックで東寧を脱出したが、母たちは父からの連絡を待っていた。当時父は穆稜と凶們的部隊を兼務しており、ソ連侵入時は母の所からは遠い凶們的部隊で戦闘中であつたとのことだった。父は五人の兵を母の元に護衛として派遣したが、兵が

到着したときは既に遅く、避難用トラックは一台もなく、やむなく徒歩で脱出するほかはなかった。四カ月、山野をどのようににさ迷い逃げたのか、十二月十日ごろやつと新京にたどり着いた。四人の兵は途中で見失い、着いたときにはただ一人となっていた。小学校の難民收容所に入ってから、母はソ連軍隊の軍服修理、整理作業をして収入を得、一枚の軍用毛布に妹と二人でくるまって十二月の寒さを凌いでいた。けれど、逃避行の疲れと気の緩みからであろう、十日目に急な高熱に倒れ、一夜のうちに帰らぬ人となつてしまった。享年三十八歳の若さであった。十歳の妹は、苦勞の末やつと落ち着けたと思つたのも束の間、頼りの母を失いただ一人となつてしまった。周囲の大人たちは、母の死を知るとたちまち、衣類、食糧、一枚の毛布まですべて奪つてしまった。それどころか、日々配給される食事まで妹の所には届かなくなった。同じ苦しみを味わっている日本人同志でありながら、この掠奪行為を、妹はどのように感じたであろうか。きっと、周囲の人が野獣のように思えたに違いない。校舎の日溜りにい

うすくま

つも蹲うすくまって、寒さとひもじさに耐えている妹の姿を見た萩原さんは、たまり兼ねて自分の食事の半分をおにぎりには届けてくれた。おにぎりは、氷点下の道を運ぶうちに、すっかり凍ってしまう。それでも妹は硬い凍ったおにぎりを受け取ると、かぶりつくようにシヤリシヤリと音を立て、夢中で食べていた。不運は重なるもので、萩原さんは高熱を出しおにぎりを運べなくなつた。一週間後、やっと熱も下がりに、おにぎりを持って行つたが、妹の姿はもうどこにも見えなかつた。飢えて死んだものか、だれかにさらわれたものか、それとも周囲の大人に売られてしまつたのか：聞いてもだれも知る人はいなかつたとのことを、涙ながらに事細かく話してくれた。私はそれを聞いて、泣けて泣けて涙が止まらなかつた。いくら悔やんでも悲しんでも帰らぬもの、半月後に一片の骨も一本の頭髮も無い葬儀を行った。たつた一枚の写真を納めた墓寂しさ、虚しさが募るばかりである。母の最後の言葉「満州の土になる」が現実となつてしまつた。満州残

留孤児のニュースや記事を見るたびに、今も心が痛み、眼を皿のようにして妹を捜した。

十一 父との再会

母の葬儀から一年が過ぎた。学校から帰ると、一通の手紙が届いていた。薄黒く汚れ、よれよれに擦り切れた封筒の裏には、シベリアのコムソモリスクと記されていた。父の筆跡であつた。一体何年かかつて、どこを通つて届いたものか。嬉しくて気も漫ろそそに封を切つた。茶色く変色した短冊状の藁半紙が一枚入つていた。その紙には

『岡に立ち 我が行く手はと眺むれど』

シベリアの朝 霧深くして道見えず』

とだけ、他には何も書かれていなかった。酷寒の地で家族を偲び故郷を思えども、これ以上のことは書くことが許されない状況なのだと推察し、早速、返信を送つた。

『降る雪も 赤城おろしも耐え忍び』

春の陽を待つ 紅椿』

当然、返事は来なかった。

父の帰国は望めぬものと諦めていたが、昭和二十三年九月末に電報が届いた。旧高崎陸軍病院から「父が危篤状態で入院した」という意味の知らせだった。急遽、伯父とハイヤーで駆け付けた。十月も近いというのに窓ガラスは一枚もなく、風が吹き抜けている病室の奥に、国防色の軍服姿の男性が、ベッドに横たわっていた。土色の顔は目を閉じたままピクツとも動かない。そっと近寄って「お父さん！ お父さん！」と二度三度声をかけたが、何の反応もない。医師の説明では、今はとても動かせる状態ではないと言う。この荒れ果てた病室に置いても快方に向かうことはないと考え、静かにハイヤーを走らせて連れて帰った。

家では、親戚の医師が待機していた。診察を終えると、首をひねって「良いところは一つもない。どこもボロボロだ」と言う。皆愕然となった。それからは、医師の治療に加えて漢方薬、鍼灸、食事療法と手を尽くしたお陰で徐々に快方に向かい、四カ月かかって元気を取り戻すことができた。九死に一生を得た父は、

それから意欲的に仕事を始めた。

父は舞鶴の港に下船し、帰国手続きを取ったとき、家族が帰らなかつたことを知った。祖国日本の生活にどれほど夢と希望を懐いていたことか、その落胆は疲れ果てた身体に波濤のごとく押し寄せ、その波に飲み込まれ、故郷に向かう列車の中で倒れてしまったに違いない。

父の持ち帰った雑囊の中には、酷寒の地で過ごした苦勞の跡が忍ばれる品々が入っていた。小さな革の切端を丹念に接ぎ合せて作ったチョッキ、足カバー、帽子など収容所裏に捨ててあった屑革を拾ったものだった。それは匠の作品とも言えるほどのでき映えだった。小箱には糸と針、拾ったボタンが大切に入っていた。金属の箱には、鍼灸の道具など一式が納まっていた。厳しい寒さからの足腰の痛みに耐えかね使用していたのであろう。一番切なく思ったのは、汚れた軍服の胸ポケットから出てきた写真であった。ボロボロに擦れ皺だらけの私と妹が写っている写真だった。三年の歲月、朝な夕なに眺め暮らしたものと、写真の皺が

語っていた。

しかし父は、シベリア生活については多くを語ろうとはしなかった。屈辱的な浮虜生活はとても口にできなかつたのであろう。ただ時折、ソ連兵との交流話をしていた。夜、人目を避けて父の部屋にやつて来て、悩みを語って帰って行く者とか、また日本に憧れ、風景、習慣を盛んに知りたがる者もいたとのこと。密かに黒パンを窓に挟んでおいてくれたなど、慕われ信頼されていた様子を懐かしむように話していた。

毎晩就寝前には、床の前に正座し、紫色の経本を手にし、般若心経を唱えることを欠かさなかつた父であつた。ソ連軍との戦闘時、穆稜部隊の方に多くの戦死者、負傷者がでたことを悔いていたのか、それとも故郷の土を踏むことのなかつた妻子の冥福を祈つてのとか、苦悶の日々を送っていたと推察している。

晩年、国から「従六位勲四等瑞宝章、勲五等雙光旭日章」を受章した。しかし、受章当時、私たちにはこの事話を話してくれなかつた。病の床に臥し、再起は不可能と悟つたとき、初めて枕元に呼ばれ、勲章と勲記

を見せられた。なぜ受章したときに話してくれなかつたのか。元氣なときに祝つてあげたかつたか悔やんだ。

重い荷を背負いながら苦悶の生涯を終える直前、小声で私に呟いた。「人生のドラマは終わった。我が人生に悔い無し」と。そして、自分で酸素呼吸器を取り除

き、静かに目を閉じ永久とわの眠りについた。享年七十二

歳であつた。何を思いながら、何を考えながら旅立つたのか。きっと、戦友一人一人の顔が浮かんでいたことであろう。

父は、次のようなことを書き遺していた。

「我 青壮言わず実践大陸の征野に奔走す

青史汚して極北凍原に虜囚丸三年

勞寒飢に堪え、公憤屈辱憎嫌を忍び邦家に

殉ずれど 病瘡を迎うるもの山河のみ

死相、奇しくも蘇り生を更めて

雑忙三昧石火光中三十年の夢 碌々たる余生

瓦全を愧ず 虚筭

また

「実りは 少なかりしも

心ゆたかに精一杯生き抜いてきた

我が越し方に悔なし

素晴らしき哉 我が人生

清水虚筭^一

とも詠んでいた。

いつ書き遺したのか、いつ詠んだものか父の死後に見出したものなので分らないが、私はこれを見るたびに、この文字の奥に潜む父の思いを計り知ることには叶わない。

十二 追悼の旅

昭和六十二年、長年抱き続けていた念願の旅、母たちを追悼する旅に出た。子供時代を過ごした思い出の各地を巡り、最後に母たちの眠る地、新京（長春）を訪ねた。長春に着くと、横なぐりの雨だった。我々を乗せた車は、まるで滝の中を潜っているようだった。これは、母たちの喜びの涙か、それとも故郷に帰れぬ無念の涙なのかと、言い知れぬ哀愁に包まれながら、ホテル長白山賓館に着いた。窓を開け放ち街を眺めて

いると、母がそこに来ている気配を感じ、ドット涙があふれ出た。ベッドに入っても、とめどなく流れる涙は髪を濡らし、枕までぐっしりとなった。眠れぬ一夜であった。

翌日、通訳の案内で、当時日本人難民収容所となっていた旧室町小学校（現天津路小学）と旧桜木小学校（現長春第二中学校）を訪ねた。夏休み中で学校の門扉は閉じていたが、そつと押し開け中に入った。そのとき「ハッ！」と驚いた。玄關脇で幼児を遊ばせている婦人が目に入った。年のころは二十七、八歳であろう。細身で長身の女性が、いつしか我が妹の姿と重なってしまった。じつと彼女を見つめたまま、どうしても目を逸らすことができなくなった。四十二年前十歳であった妹が、この若さでいるはずもないのに、生きていてほしい。会いたい、と思う気持ちが妹に見えた。声を掛けようか、駆け寄って抱きしめたい気持ちにかられた。彼女は、私の様子を怪訝に思いながら、何度となく笑顔で会釈を繰り返した。私の咽はコルク

栓でも詰まったように硬く苦しく、目は霞み、身は宙に浮いているようだった。校舎の周囲を歩きながら、どの教室が母たちの生活した所なのか、どの辺りに妹は蹲っていたのかと、その情景を様々に想像しているうち、顔はほてり、目は血走り、頭は破鐘のようにガンガンと痛み、耳鳴りまで聞こえてきた。終戦時、この長春だけで三万一千人が、旧室町小学校で八百人が亡くなり、その人たちは校庭に掘られていた防空壕に次々と捨てられ、いっぱいになると埋められたと説明された。校庭の南に一本、青々と葉を繁らせた榆の木が立っていた。この辺りに防空壕があったに違いない。

ひざまず

思わず根元に 跪き、地に平伏して祈った。さやさやと風にそよぐ葉音が、母たちの囁きに聞こえ、地の下からは、無念の啜り泣きが聞こえ、止まらぬ涙の雫は赤土に浸みていった。

通訳は、さらに各地で死亡した日本人遺体を集め葬った場所があると、そこへ案内してくれた。墓地を想像していたが、そこは見渡す限りの杉苗畑だった。数

年前、営林局植林地になったと説明された。同胞たちは、この緑の木々と化してしまっただのかと杉苗がいとおしく思えてならなかった。幾星霜、祖国に帰れぬ無念の思いを抱えたまま、何万体の霊がこの地に眠っているのかと、万感の思いで手持ちの菓子を「遠くまで届け！」と叫びながら力を込めて撒き合掌し、霊の冥福を祈った。

十三 おわりに

日本に帰ってから私は、高等学校を昭和二十五年三月に卒業し、国立群馬大学に進学、昭和二十九年三月に同大学を卒業した。その後、県内高等学校教諭及び県教育委員会高等学校教育課指導主事等として奉職することができた。この間、各種の研究會、研修會、講演會など、機会があると戦争引揚げ体験を語った。また生徒たちにも、毎年八月が近づく夏休み前に、広島、長崎の悲惨なできごと、戦争引揚げの恐怖を話してきた。この教え子たちは今、母となり祖母となつて次世代の人々と関わっているが、時折開かれる同窓會で必ず私の引揚げ苦勞話が話題となる。歳月を経てもなお、

私の話したことが彼女たちの心に留められているということは嬉しいこと。戦争の悲惨さは、後生に伝えられてゆくと確信している。

しかし今、地球上のあちこちで無意味な争いやテロが繰り返されている。一日も早く世界が平和になることを願わずにはられない。